

代院長)ではなく、八杉貞利が抜擢されたことで校長と衝突したとされている(事の真偽は定かではないが、ハルビン学院ではこの一件は伝説になっていたという)。その後の外語における八杉の功績を考えると、二葉亭の人選が必ずしも正しかったとは言えないが、ただ日露戦争勃発と同時に第一軍に通訳として志願したのが井田であることを考えると、国士としての気概という点で両者が意気投合していたとは想像できそうだ。

六 明治期の露語科の授業内容

驚くべきグレーポフの文法書

当時使用された文法教科書はグレーポフ著、岩沢丙吉訳の「露西亜文法」であった。今では知る人も少ないこの教科書の著者セルギー・グレーポフは一八八八(明治二十一年)年に来日した露国公使館付司祭であり、岩沢丙吉はニコライ堂附属神学校を卒業、ペテルブルグ神学大学へ派遣されて神学士の学位を取得、一八八八年に帰国して神学校教授を務めていた(岩沢は後に陸軍士官学校教授となり、一九三五〔昭和十〕年退官、四三年に八十歳で死去した)。

一八八八(明治三十一年)年に初版が出たこの教科書は前編形態論、後編文章論からなり、各課のすぐ後に練習用例文とその和訳をつけたもので、菊判四三二ページの大冊であった。前編では不規則変化の稀用の名詞、動詞まで網羅的に細大漏らさず取り上げられ、詳細周到な説明が付けられている。活字はすべてウラジオストックから取り寄せたものであった。

一九〇一(明治三十四)年に出た第二版「改訂増版露西亜文法」では、一行の字数、一ページの行数を増やし、活字も五号と六号を併用し、さほど重要でない事項は六号活字で組み、練習問題とその和訳は一括して後に回してある。

練習問題の量もきわめて多く、例えば形容詞、副詞の比較級の問題だけでも一三五題ある。ページ数は文法篇三〇五ページ、練習問題一一〇ページ。第二版ではさらに訳読用の露文テキストとその和訳など、一六〇ページが追加され、総ページ数は菊判五七七ページとなった。これは当時の日本において訳読用教材の入手がきわめて困難であったという事情によるものと思われる。なお一九三二（昭和七）年に出た新版では書名も「岩沢丙吉訳グレーボフ露西亜文法」と改められ、新正字法についての脚注が付けられ、巻末の訳読教材はことごとく削除され、代わりにロシア語の諺と名句が二〇ページ、文法篇で用いられた単語のほかに若干の新語及び革命後の略語を加えた七、〇〇〇語の小辞典一一八ページが添えられた。これはこの時期、訳読教材の入手が比較的容易になったことと、信頼すべき露和辞典がまだなかったことへの考慮からでたものと思われる。

一九〇一（明治三十四）年版の緒言において原著者グレーボフは、この文法書の使用に当たっては、重要なものを最初に学習し、さほど重要でないものは後に回し、さらに細密な規則などは露語一般に通じた後で履修するよう指示している。一九一〇（明治四十三年）入学の大谷二郎（満州黒河副領事）は、「その頃はロシア語の本と云えばグレーボフ文典とルスカヤ・レーチ第一巻だけで、後は全部コンニャク版の刷物を分ち与えられた」と回想しているが、この文法書は一九一六（大正五）年に八杉貞利の『露西亜語学階梯』が出るまでなんと一五年以上にわたって使用されたわけである。

八杉貞利の功績

ここで話を戻し、名実ともに第二次外語露語部の精神的支柱となった八杉貞利のことを述べておく。八杉は一八九七（明治三十）年東京帝国大学文化学博士（一九〇〇年言語学科と改称）に入学、在学中すでに国語学、国文



八杉貞利

学について数々の論文を発表、言語学についても幾つもの訳書、著書を出す一方、上田萬年に従ってアイヌ語の現地研究に従事、さらに一年上級の新村出とともに先輩を説いて日本言語学会を創立し『言語学雑誌』を創刊、雑誌『帝國文学』の編集にも参加し、自身もこれに小品を発表、歌人としてもまた名をなしていた。

一九〇〇（明治三十三年）年七月恩賜の銀時計を拝受して東京帝大を卒業した八杉は、当時文部省学務局長兼東京外国語学校校長事務取扱であった恩師上田萬年の指示に従ってロシア語学研究の道に進むことを決意、同年九月外語露語科別科に入学、〇一年十月、文部省から露国留学を命ぜられ、〇二年一月（露曆三十四年十二月）ペテルブルグに到着した。ペテルブルグ大学ではボドウエン・ド・クルテネー教授の言語学概説を聴講、その自宅での私的な講義にも出席した。

一九〇三（明治三十六）年、在露中に外語教授に任官、翌〇四年二月、日露開戦により急遽帰国して五月から教壇に立った。この時まだ二十八歳の少壮教授であった。一九一〇（明治四十三年）年に入学した山中忠雄は「当時の教授陣は鈴木於菟平、八杉貞利両先生、講師は河津敬治郎（陸大教官）、トドロヴィチ両先生であった。このなかでいちばん授業時間を多く持つておられたのは八杉先生で、訳読、文法、作文、新聞等々、殆ど全科の半分ぐらい担当されていた。文法はグレーボフの大文典であった」と回想している（戦後『ロシヤ会報』第二三号）。

一九一一（明治四十四）年、八杉編の『クニーガ・ド

リヤ・チチエーニヤ』が出る。これはペン字書き草書体の原稿を凸版印刷したもので、布装二〇〇ページ、東京外国語学校発行となっている。これは基礎文法の学習を終わって本格的な文学作品などの講読に移る前の中間段階の教材であり、おそらく八杉はグレーボフ文法の付録の訳読教材の内容に飽き足りなかつたのであろう。これは後の「八杉初等露語読本」の基礎となる。

講読したテキストを次の時間の冒頭で生徒に一節ずつ輪読式に暗唱させるのが八杉の教育方針で、この暗唱を重視する教育法は後述するドロヴィチによつても採用され、以後八杉教授在任中、一貫して実行された。また和文露訳については一九一一（明治四十四）年卒業の宮村時一郎が和文問題と露文解答を清書した貴重なノート三冊（本学図書館蔵）を遺している。八杉担当の二学年一冊、鈴木、八杉担当の三学年各一冊で、和文には国際政治、経済、外交、利権交渉等、時事問題に関するものが多い。八杉は随所で同義あるいは類義の動詞、および固定した語結合を一括提示してその用例を示している。指名された生徒が黒板に解答を書いている間に、生徒一人一人の机を回つて、その露文を個別に点検、批評、添削するという徹底した教え方だったという。

一九一五（大正四）年に入學した除村吉太郎は「外語を出て五十年」のなかでこう述懐する。

一年の時はロシア語の時間が週二十一時間もあつた。初等の読本を終えると、一年の後半から文学作品の廉価版を教科書にして、十九世紀の諸作家ととりくんだ。鈴木於菟平先生はプーシキンの「発射」（神西君はのちに「この一発」と訳したが）と「大尉の娘」、八杉先生がトルストイの「イヴァン・イリイチの死」とプーニン「喘息」、北島常晴先生がゴーゴリの「外套」、河津敬治郎先生がトルストイの「セヴァストーポリ」をやつてくれた。その他にもロシア史の本、世界地理の本、あるいは「ピョートル大帝伝」といったようなものもあつたが、いちばん力を入れて読んだのは文学作品であつた。

（『ロシア学会報』第一五号、一九六七年）

今と違って五〇分授業にしろ、大変な量のテキストである。だがこれが露語部の教育の基本方針であった。基礎文法と初等読本を終えた段階で、文学作品は担当教師の文学的素養の有無や生徒の資質によって、授業の内容に多少の差異があり得たとしても、生きたロシア語の原文に接し、文法知識を補い、読解力を高めるための絶好の教材であった。文学作品を語学教育の中心に置くという旧外語の伝統は継承されたわけである。

その後一九一六（大正五）年に「露西亜語学階梯」が出、九年後の一九二五年には新正字法による「改訂露西亜語学階梯」となり、動詞変化一覧、会話材料などが増補され二九〇ページとなったこの教科書は、戦前、戦後を通じ、簡にして要を得た最高の入門書として全国で広く用いられた。

アレクサンドロフの露英辞典を和訳した「新譯露和大辞典」（鈴木於菟平、八杉貞利、松本圭亮共訳）が出たのは一九一九（大正八）年で、語数五万語余、新書版で一、六五七ページの大冊で、辞書がなくて苦勞していたロシア語学習者にとっては一大福音であったと想像される。八杉貞利編の露和辞典が出るのは、一九三五（昭和十）年のことである。これは見出語数の多さ、例文の豊富さにおいて、またすべての語にアクセントを付け、その変化形を明示した点で、従来の露和辞典をはるかに凌駕する画期的なものだった。この辞書は以後四半世紀にわたり、国の内外のロシア語学習者、ロシア、ソ連研究者にとって座右の書となった。

八杉は一九三七（昭和十二）年三月停年退官し、名譽教授の称号を受けるが、なお非常勤講師として一九四四年三月まで教壇に立った。一九五〇（昭和二十五）年に日本ロシア文学会が創立され、八杉は会長に推挙されている。八杉の著作はロシア語学以外に言語学、ロシア文学（『詩宗プーシキン』〔一九〇六年〕をはじめ多くの翻訳もてがける）にもおよび、とてもここで列挙するゆとりはないが、『岩波ロシア語辞典』（一九六〇年）は畢生の大事業である。この時八杉は八十三歳、この業績により一九六一（昭和三十六）年に朝日賞を受賞、また六四年にはかつて彼が学ん

だレニングラード大学から名誉博士号を贈られている。

鈴木於菟平と沿海州への修学旅行

順序が逆になったが、明治・大正期の露語科の名物教授として生徒たちに慕われた鈴木於菟平のことに触れておかねばなるまい。彼は旧外語に一八七四（明治七）年に入学しているから、二葉亭より七年先輩にあたり、卒業後実業家を志し、沿海州とりわけニコラエフスク（尼港）に長く暮らし、ペテルブルグにも滞在してニコライ二世に拝謁したこともあるというから、ロシア人の知己も多く、明治期きつてのロシア通のひとりといってもいい。一九一九（大正八）年卒の松田正綱は書いている。「先生が露語を話しているのを聞いてみると、ロシア人が話しているのかと思うほど見事な発音と語法で、所謂「パ・ルースキー」とはこれだと思わされたものだ」（『ロシア学会報』、第二五号、一九七九年）。短軀で小肥り（生徒たちはポーチカ、樽とあだ名していた）、笑顔を絶やすことのない温顔で、この点長身瘦軀、謹厳実直な学者型の八杉貞利とは好対照をなしていた。ロシアでの体験談を話すのが得意で、それを知って予習をしていない生徒たちが、「先生、今日はロシアのお話を……」と言うと、「にこにこしながらロシアのお話をしてくださいましたオヤジのような先生」（同右）で、麴町区竹平町の旧校舎の正面入口の脇に台柱にのつた胸像があった（戦時中の金属供出で撤去）というが、それだけ生徒のあいだで人望があったということだろう。

そして鈴木教授を語る場合に忘れてならないのが、一九一〇（明治四十三）年の沿海州への修学旅行である。この年の夏休みを利用して、露語科の生徒一四名が鈴木教授の引率のもと、七月十日から八月六日まで、ニコラエフスク、ブラゴヴェシチェンスク、ハバロフスク、ウラジオストックを訪問、各地で熱烈な歓迎を受けたのだった。日露戦争終結後五年目にしては画期的なこの大旅行を実現させたのは、ひとえに鈴木の大膽な性格と彼の極東ロシアにおけ



鈴木於菟平

なみに島田の長男島田弘毅は一九二四（大正十三）年に露語科を卒業している。また緒方整肅（明治三十六年卒）は外務書記生として当市にあり、さまざまな斡旋役を買って出た。

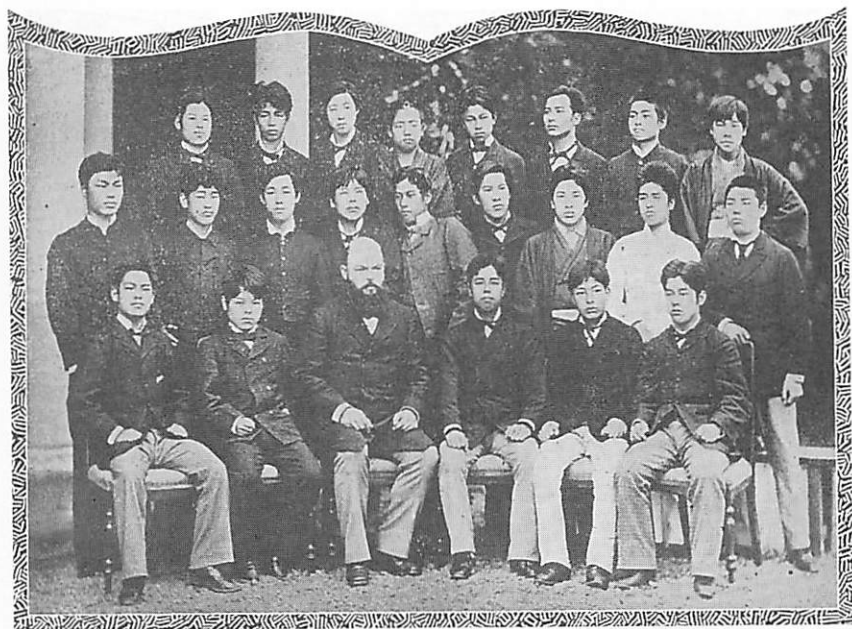
沿海州、シベリアと外語露語科

この一九一〇（明治四十三年）年の『校友会雑誌』の「露語科卒業生の消息」を見ると、まるで日本海が内海であるかのように、函館、敦賀と極東ロシア各地に多勢の卒業生が、外交官、商社員（とくに三井物産）、軍部通訳、教師などとして配置されており、その数と外語出身者の占める割合は今日では想像も出来ないほどである。とりわけウラジオストック（浦潮）における外語出身者の活躍には目を見張るものがある。この港町には日本の貿易事務館が早くから置かれ、そこには旧外語の卒業生川上俊彦^{としひこ}が、第五代目の貿易事務官として、日露戦争まで勤務していた。外交

る豊かな人脈であろう。東京外国語学校の一行がニコラエフスクを最初の訪問地としたのには理由があった。学生たちの船賃も食費も一切面倒をみることになる島田商店の根拠地だったからである。島田商店の社長島田元太郎は、ロシア移民の草分け的存在で、十六歳でロシアに渡り、漁業関係の仲介業者として財を築き、その地では「在留邦人中のキング」、「ニコラエフスクの総督」とまで呼ばれた人物である。島田商店の繁栄ぶりは、当時独自の紙幣まで発行していたことからでも察せられる。ち

官として在ハルピン総領事、在モスクワ総領事、満鉄理事、在ワルシャワ特命全權公使、北樺太鉱業会長、日魯漁業社長を歴任した川上は、日露開戦時に居留民の引き上げを指揮し、水師營での乃木、ステッセル会見の通訳を務めた人物であり、旧外語と第二次外語との橋渡しの役割をになつていた。ちなみに彼が発起人となつた旧外語の露語科同窓会は、恩師コレンコの名をとつて瑚璉壺会と名付けられていた。彼の筆になる『浦潮斯徳』（一八九一年）という七〇ページの小冊子は、この町に関する最新情報を限なく伝えるものである。わが国のロシア情報は欧米、とりわけ英語文献によつて入つていたさうだが、この川上や村松愛蔵（「露国事情」、「外征紀行」、「扶桑新聞」掲載）らロシア語を学び、あるいは旅行で、あるいは勤務でロシアに滞在したものによつてもたらされた情報は当時としては非常に貴重なものであり、陸軍参謀本部によつても注目されていた。しかも興味深いのは、日露戦争を挟んだ時期にはモスクワやペテルブルグといったヨーロッパ・ロシアではなくバイカル湖以東のシベリア、極東地方に圧倒的に日本人が居留しており、したがつてロシアに関する情報も中央からの公式のものというより、辺境からの生々しいものだったということである。

前述の井田孝平と同期の和泉良之助（明治三十四年卒）のように一九〇七（明治四十）年にこの町に渡り、居留民会の幹事の傍ら同会に付属した夜学の露語学校を開き、数十名の卒業生を出す一方、日本語雑誌を発行して経済上の日露の接近を図る者もいた。またハルピンには北滿州における唯一の日本語新聞である「北滿州」主筆で、露国事情を日本人に知らせるだけでなく、同名のロシア語紙をも発行し、日本を研究するロシア人に日本事情を伝えた布施勝治（明治四十年卒）のようなジャーナリストもいる。彼こそはのちに毎日新聞のモスクワ特派員として世界ではじめてスターリンの独占インタビューに成功した人物である。この鈴木による極東旅行が引き金となつて、露語科の学生が毎年のようにシベリア、滿蒙などを個人、あるいは集団で旅したことは、「校友会雑誌」に毎号のように載つた紀



前列向かって右より桑原謙蔵、中澤房則、川上俊彦、コレンコ、鈴木要三郎、田中達三郎。中列・太田黒重五郎、鳥居忠怒、奥野廣記、鳥山頼二、遠藤雅太郎、平生飢三郎、室田百一郎、小久保寅三、長谷川辰之助。後列・鳥越儀助、前田銀次郎、佐波武雄、杉浦龍吉、和田午吉、青柳尚香、藤村義苗、片岡長太郎。明治17年7月教師コレンコ帰国及び川上俊彦、鈴木要三郎、小久保寅三、三名の卒業記念のため旧外国語学校玄関前において撮影

行文からも分かる。時代は下るが、一九一九（大正八）年に鈴木、八杉両教授に引率されたシベリア旅行は、そうした前例があつてはじめて可能となつたであろう。すでにロシア革命が勃発して二年ちかい歳月が経過し、日本をはじめとする干渉軍がシベリアに出兵している最中であり、またロシア国内は内戦も終結せず、とくに中央から遠く離れたシベリアではコルチャーク、セミョノフといった反革命白衛軍政府、さらにはいくつものパルチザンが各地で決起している渦中である。たとえ軍部による警護があつたにしろ、二七名の学生を引き連れて（この中には外語会の中心的役割を長く務め、先頃亡くなつた後藤篤「大正九年仏語卒」も参加していた）ウラジオストック、



大正8年7月10日、シベリア旅行団一行（敦賀にて、船は台中丸）。中央八杉貞利、その左鈴木於菟平、その左島本愛之助

ポグラニーチナヤ、ハルビン、チチハル、満州里、チタ、イルクーツク、チタ、ハルビン、大連というコースを旅行することは並大抵のことではできない。八杉貞利はこのときの模様を『貝加爾日記』として克明な日記を残している。和久利誓一監修の八杉貞利日記『ろしや路』（図書新聞双書、一九六七年）に収められたこの日記には、「広漠万里の無人境に僅かに二、三師団の兵を出し、寒村に五十、百の守備隊を置き、少しく団結せる敵来れば、忽ちにして全滅の厄に遭う。而して『コルチャク』軍はしきりに敗退の報を伝え、『セミョーノフ』軍は或は故意か、之が救済に赴かんともせず。西比里亜出兵の甚しく無意義なるを感じざるを得ざるなり」（七月二十二日）といった率直な記述もあり、八杉の冷静な観察が随所に見られ、この時期のシベリアの混沌とした状況を知るための第一級の資料となっている。